

(論文内容の要旨)

既視体験（デジャ・ヴュ体験；Déjà vu experience）とは、初めてのことであるにもかかわらず、「まったく同じことが前にもあった」と思う体験である。既視体験に関して、記憶や知覚などの認知機能についての研究が中心であったのに対して、本論文は、既視体験研究における主観的側面を扱ったものである。調査方法としては、質問紙調査およびロールシャッハ・テストと反構造化面接が用いられ、心理臨床学的観点から見た既視体験を捉えようとした。

第1章・第2章では、既視体験研究の概観がなされ、超心理学・認知心理学・精神医学・精神分析学・脳神経学それぞれの観点から見た既視体験についてレビューが行われた。特にフロイトからは、「防衛機制としての既視体験」と「防衛機制弱体化時に生じる既視体験」の2種類があることが明らかになった。

第3章は、質問紙を用いての基礎研究で、既視体験の体験率、頻度、生じやすい年齢、生じやすい状況、持続時間、体験に伴う感情、体験についての意味づけ、体験時の心身状態についての特徴が論じられた。

第4章「既視体験における主観的体験内容の分類」は、非臨床群を対象とした質問紙調査で、既視体験の体験内容として①離人感を伴う二重意識、②生き生きとした familiarity、③言語化不能な圧倒的強烈さ、④予知できる感じ、⑤運命・縁がある感じ、⑥必然感の6つの因子が抽出された。このように、主観的体験内容のそれぞれの要素は、離人症や神秘的・宗教的体験と重なり合う部分を持つ一方で、既視体験独特の内容を持つことが示された。

第5章「既視体験と離人傾向との関連」では、既視体験およびその体験内容と離人傾向の関連について検討がなされた。先行研究では、既視体験と離人感とは関連があるというものと関連がないというものがあったが、本研究における質問紙調査の結果、以下の2つのことが明らかになった。すなわち、離人感の頻度と既視体験の頻度は関連が見られず、離人感の頻度が高い人は、既視体験時に離人感を伴う既視体験を多く体験した、というものである。つまり離人感の頻度は、既視体験の頻度には関連がなく、既視体験の主観的体験内容に関連があることが示された。これは、一見相反していた先行研究の結果を矛盾なく説明できる結果であると考えられた。

第6章「既視体験とその解釈仮説との関連」では、既視体験の主観的体験内容とその解釈仮説がいかなる関係にあるのかを検討することが試みられた。まず既視体験解釈尺度（DI 尺度）が独自に作成され、4因子抽出された。①超越的・つながり解釈因子、②記憶の混乱による解釈因子、③心身の影響による解釈因子、④脳神経学的解釈因子の4つである。

次に、既視体験内容尺度（DC 尺度）と既視体験解釈尺度（DI 尺度）の因子得点のそれぞれの相関が検討された。その結果、①既視体験の中でも、鮮明な意識状態で縁や運命を感じるほどのインパクトがあるものは、人智を超えた超越的な体験・自分と

のつながりを意識する体験として解釈される傾向がある。②予知できる感じが強い既視体験は、必ずしも不思議な体験としては体験されず、合理的に解釈される傾向がある。③離人感を伴う二重意識や言語化不能な圧倒的強烈さを含む既視体験は超越的・つながりを解釈する傾向がある一方で、自らの心身状態を顧みる傾向がある。④離人感や強烈さを伴わない familiarity や必然感は陶酔的な神秘体験となるがゆえに、自身の心身状態を顧みることなく、そのまま超越的解釈に直線的に進む傾向がある。⑤既視体験に独特の要素である「予知できる感じ」と「運命・縁がある感じ」は、共に記憶理論による解釈がなされにくい点で共通であったが、前者は脳に原因を求める意味づけがなされ、後者は何によっても説明が困難であるという傾向が見られた。

第7章「ロールシャッハ・テストのサインアプローチを用いた既視体験内容の分析」では、ロールシャッハ・テストのサインアプローチを用いて、改定版 DC 尺度の因子分析によって得られた 5 つの因子①離人感を伴う二重意識、②生き生きとした familiarity、③予知できる感じ、④運命・縁がある感じ、⑤言語化不能な圧倒的強烈さの体験内容について検討が加えられた。

生き生きとした familiarity については、サインアプローチによっては特徴的な有意差が得られなかった。予知できる感じについては、既視体験に伴う意味深い面が予知できる感じとして意識化される場合と、合理的な考えに留まろうとし、合理的解釈の枠を越えられない場合があると推測された。運命・縁がある感じ、および言語化不能な圧倒的強烈さについては、「衝動」に近い感情、もしくは「原初的で未分化な感情」である可能性が示唆された。

第8章「既視体験事例の検討」では、①離人感を伴う二重意識、②生き生きとした familiarity、③予知できる感じ、④運命・縁がある感じがそれぞれ特徴的に見られた 4 つの事例を通して、既視体験におけるそれぞれの体験内容について検討が行われた。第1章の最後に検討した「防衛機制としての既視体験」と「防衛機制弱体化時に生じる既視体験」の分類を考えるならば、事例①と事例③の考察より、離人感を伴う二重意識と予知できる感じは前者の既視体験に関連すると考えられた。一方、事例②と事例④の考察より、生き生きとした familiarity と運命・縁がある感じは、後者の既視体験と関連としていると考えられた。

第9章「総合考察」では、防衛機制という考え方で既視体験を捉えることの限界が指摘され、個人の中で完結していない「開いた心」や、解離のメカニズムで既視体験を理解していくことが検討された。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、これまで記憶などの関連での、認知的な研究が中心であった既視体験について、その主観的体験に焦点を当て、心理臨床学的な観点から研究したものである。方法論的にも、先行研究をふまえつつ、量的な調査研究から質的な研究をへて事例研究まで、多角的な方法論を用いて、既視体験の表面的な特徴から、主観的な体験を深めるところまで進んでいこうとしている。そのために漸進的に事柄が明らかになっていて、読みやすく、構成的にすぐれた論文であると言えよう。質問紙による調査においても、まずは既視体験の様々な特徴を記述的に拾い上げて捉えようとするところからは始めている。

次に質問紙調査における既視体験の主観的体験内容の分析では、①離人感を伴う二重意識、②生き生きとした familiarity、③言語化不能な圧倒的強烈さ、④予知できる感じ、⑤運命・縁がある感じ、⑥必然感の6つの因子が抽出された。これらは、既視体験が一方では自分に異質のものによって圧倒されるような感じや、それに関連して離人感を感じさせるものでありながら、他方では親しみや縁を感じさせるものであるといういわば両極的な特徴を示していると思われる。つまり絶対的に他者であるものが、同時に親しいものであることが既視体験の主観的体験の中で中核的であると考えられ、これは既視体験の主観的体験の本質に迫るための重要な手がかりが捉えられていると言え、高く評価できよう。

離人傾向との関連では、これまでの先行研究の結果が分かっていたのに対して、離人傾向は既視体験の頻度には関係ないものの、離人感の頻度が高い人は離人感を伴う既視体験を多く示すことが明らかになった。つまり離人傾向で既視体験を説明できないけれども、既視体験の中に離人的な要素も含まれていることがわかり、主観的体験に焦点を当てることによって、分化した結果や考察が可能になったと言えよう。

既視体験の主観的体験内容と、その解釈仮説がいかなる関係になるかの検討は、既視体験の心理臨床学的な研究としては、中心的な部分を占めると言えよう。まず、既視体験の解釈因子からすると、超越的・つながり解釈のように、説明のつかないような体験、非合理的なものとして解釈するものから、記憶の混乱や脳神経学的解釈のように、合理的な解釈をするものに渡っていることがわかる。

主観的体験内容と解釈仮説との関係では、鮮明な意識状態でインパクトのあるものや、離人感を伴わない familiarity や必然感のある既視体験は、人智を超えた超越的な体験として解釈される傾向がある。それに対して予知できる感じが強い既視体験では、合理的に解釈される傾向があった。離人感を伴う既視体験では、その両方の解釈仮説の傾向があった。これらのことは、合理性を超えた解釈仮説と、合理的な解釈仮説とが、既視体験の主観的な体験内容と関連していることを示していて、非常に興味深い。主観的に強烈で、自分を越えた体験をすればするほど、既視体験を超越的なものとして捉える傾向があると言えよう。

その後のロールシャッハ・テストを用いた調査は、既視体験そのものを明らかにす

る研究であるより、既視体験における様々な主観的体験のあり方と、人格特性や体験様式との間の関係を調べる研究であると言えよう。ロールシャッハ・テストのサインアプローチの結果からは、既視体験における離人感を伴う二重意識に関しては、事象から距離を取りすぎていることや、情緒的ショックからの防衛として離人感が生じていることが推察された。また既視体験における運命・縁がある感じについては、「衝動」や「未分化な感情」が関係していると考えられた。さらに言語化不能な圧倒的強烈さに関しても、「原初的で未分化な感情」が関係していることが示唆された。このように既視体験における様々な主観的体験要素は、ロールシャッハ・テストを用いて調べてみると、その人の体験の仕方や傾向と関係していることがわかり、興味深い。研究対象をいわば転倒させていることになるが、既視体験に、その人の体験様式の特徴が示されてくることになるのである。また防衛という観点からすると、防衛的なものとしても、防衛とは無関係なものとしても既視体験が生じてくることが伺われる。

またロールシャッハ・テストの事例研究と半構造化面接からは、「離人感を伴う二重意識」と「予知できる感じ」を中心とした人は、「防衛機制としての既視体験」をしており、「生き生きとした familiarity」と「運命・縁がある感じ」を中心とした人は、「防衛機制弱体化時に生じる既視体験」をしていると考えられている。これも、個人の体験様式と特徴と既視体験のあり方が明らかにされており、興味深い結果が示されたと言えよう。

本研究は、既視体験の主観的な体験のあり方を追求していき、その中で特に様々な既視体験の様相と、個々人の認知スタイルや体験の仕方との関係を後半では主に明らかにしたと言えよう。既視体験の主観的に焦点を当てた研究がほとんどないなかで、これは非常に重要な成果であると言えよう。しかしながら、試問で指摘されたように、既視体験そのものの心理学的特徴については、もう一つ明らかにされなかったかもしれない。「全くの他者や異物」であるはずのものが、なぜか「親しみ」を持って感じられ、そこに「縁」が感じられるという本研究で捉えられた因子構造こそが、本来は未知のはずのものがなぜか知っているものに感じられるという既視体験の本質に迫っていて、その関係を追求することが今後必要であろう。しかしそのような指摘があっても、既視体験の主観的側面に心理臨床的観点からアプローチした本論文は貴重な研究であると考えられる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成20年5月22日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。